

舞

鹿児島県立大島北高等学校

三年

赤塚 あかつか

結南 ゆうな

夏の盛りが過ぎ蝉の声が遠のき始める頃、潮風が吹きぬける小さな島に、夏の終わりを告げるもう一つの音が響き始める。それは集落の公民館から聞こえてくる、軽快なチヂンの音。八月踊りの練習が始まった合図だった。この島で生まれ育った加那にとって、八月踊りは特別な意味を持っていた。それは、三年前に亡くなった祖母との、かけがえのない思い出だったからだ。祖母はシマでも指折りの踊り手で、毎年この時期になると加那に踊りの手ほどきをしてくれた。

「踊りはね、心そのものなんだ。嬉しいときは弾むように、悲しいときは静かに、心のなかにあるものがそのまま現れるのよ。」

と、優しく微笑みながら語ってくれた祖母の言葉は、今も加那の心に深く刻まれている。祖母が亡くなってから、加那は踊りから遠ざかってしまった。踊りを見ると、祖母との楽しかった日々が鮮やかに蘇り、胸が締め付けられるような痛みを覚えるからだ。

「今年も踊らないの。」

夕暮れの道を歩く加那に、幼馴染の和音が声をかけた。和音は、加那の祖母が踊りを教えていた頃から、ずっと加那を見守ってきた。

「うん。踊る気になれなくて。」

加那は目を伏せ小さく答えた。和音は何も言わずただ加那のそばをゆっくりと歩く。その静かな優しさが、加那にはかえって辛かった。

八月踊りまであと一週間。シマは踊りの準備で活気づき、子どもたちの笑い声が路地に響く。加那は少し離れてその様子を見つめていた。楽しそうに練習する人々の笑顔、軽やかな踊りの手足。それらは、加那の心に深い孤独感を募らせた。

「加那。」

背後から声が聞こえ振り返ると、和音が立っていた。手に持った提灯が、和音の表情を柔らかく照らしている。

「やつぱり来てたんだね。」

和音はそう言い、語り出した。

「おばあさんのこと、今でも覚えているよ。踊りながら、いつも加那のことを気にかけてた。加那が踊り手として立派になるのを、楽しみにしてたんだよ。」

和音の言葉に、加那は何も返すことができなかった。

「私は、おばあさんが大切にしていたその想いを加那に伝えたい。だから一緒に踊ろう。」

和音はそう言って加那の手を取った。その手は、昔と変わらない、温かく力強い手だった。しかし、加那は迷った。祖母や和音の思いを感じたからこそ、加那の心は更に揺れ動いた。

「私にはもう踊れない。おばあちゃんの思いに応える資格はない。」

そう言って加那は和音の手を離し駆け出した。

アラセツ一日目。夜になると、公民館は集落の人でごった返した。大勢の人の話し声や笑い声で溢れ、賑やかなチヂンや三味線が鳴り響く。人々は浴衣姿で輪になって踊り、その熱気は夜空高く舞い上がっていくようだった。その頃加那は、祖母の古い木造の家に一人でいた。部屋の片隅には、祖母が八月踊りのときにいつも着ていた、藍色の浴衣が大切に畳まれている。加那はそっとその浴衣に触れた。柔らかな木綿の感触が、祖母の温かい手を思い出させる。その時、浴衣の襟元から一枚の手紙がひらっと落ちた。それは、祖母の筆跡だった。

「加那へ。この手紙を読む頃には、私はもういないだろう。でも心配しないでね。私の心はいつも加那のそばにいるよ。踊りは心を繋ぐ魔法なんだ。たとえ遠く離れていても、同じリズムに乗って、同じ思いを抱いて踊れば、心は一つになれる。この浴衣はそんな私の思いがこもった大切なもの。いつか加那がもう一度踊りたくなったらと

き、この浴衣を着てね。それが私にとって一番の幸せだから。」

手紙を読み終えた加那の目から、大粒の涙がこぼれ落ちた。祖母は、加那が八月踊りから離れてしまうことを案じ、またいつか踊り出すことを、ずっと願っていてくれたのだ。和音の真っ直ぐな眼差しと想い、祖母の笑顔、手紙の言葉が、加那の心に勇気を与えた。

「もう一度踊りたい。」

そう呟いた加那はすぐに祖母の浴衣に着替え、公民館に急いだ。祖母の浴衣を身にまとい輪に足を踏み出した加那は、少し緊張していた。しかし、一度輪の中に入りチヂンのリズムに乗り始めると、不思議と体が軽くなる。祖母から教わった懐かしい振り付けが自然と身体から溢れ出した。最初はぎこちなかった加那の動きも、やがて滑らかになり、一つ一つの所作に、祖母の面影が宿っているようだった。踊りながら、頬を涙が伝った。それは、悲しい涙ではなかった。祖母との思い出が痛みではなく、温かく愛おしい記憶として心に満ちていくのを感じたからだ。「踊りは心を繋ぐ魔法」祖母の言葉の意味が、今、心から理解できた。遠い空のむこうにいる祖母と、今この場所で同じリズムに乗って、同じ思いを分かち合っている。そう感じた瞬間、加那の心は何物にも代えがたい幸福感に包まれた。夜が更け踊りが終わる頃、

加那の心は晴れやかになっていた。提灯は静かに揺れている。もう寂しさはなかった。

「ありがとう、和音。」

加那は、隣に立つ和音に微笑みかけた。和音もまた、優しい笑顔で加那を見つめ返した。八月踊りは、加那にとって祖母との思い出を乗り越えるための儀式だったのかもしれない。そしてそれは、過去の痛みを愛おしい記憶として受け止め未来へと進むための、大切な一歩となったのだ。夜が明けても、加那の心は温かい光が灯っていた。祖母の浴衣を丁寧に畳みながら、その柔らかな木綿の感触を指でなぞる。昨夜これを身にまとい踊ったことで、祖母の思いと自分が一つになったような気がしたのだ。

「この浴衣、おばあちゃんが私に残してくれた魔法だったんだね。」

加那はそっと呟いた。その浴衣はただの浴衣ではなく、祖母の愛と踊りへの情熱が織り込まれた、かけがえのない宝物だった。

翌年、加那は八月踊りの練習が始まる頃、公民館の門をくぐった。昨年までとは違う、晴れやかな気持ちで。その手には大切に抱えられた祖母からの藍色の浴衣。

「加那、今年も一緒に踊ろうね。」

和音が笑顔で迎えてくれる。加那は頷き、浴衣に着替え

鏡の前に立った。祖母の姿がそこに重なる。胸の奥に、確かな力が湧いてくるのを感じた。チヂンの音が鳴り始め、加那は輪の中へと入っていく。自然と笑みがこぼれた。この浴衣とともに、祖母の思いを胸に、加那は新しい一歩を踏み出した。それは、過去を乗り越え未来へと続く希望の舞だった。